



## もくじ

展示紹介

江戸の祭神 弁財天と不動明王 .....	P1
浮世絵にみる信仰～江の島弁財天と成田不動～ .....	P2,3
日本の不動明王信仰 .....	P4
浮世絵こぼれ話2   江戸時代の富士講／浮世場なれ .....	P5
二代目オニカゲ学芸員のページ⑭	
光あれ！～展示室の照明のひみつ～／編集後記 .....	P6

## 江戸の祭神 弁財天と不動明王

会期

2024年11月13日(水)～12月15日(日)

前期:11月13日(水)～11月27日(水) 後期:11月30日(土)～12月15日(日)



歌川広重「江の嶋弁才天開帳詣」藤沢市教育委員会所蔵

江戸時代は、大きな戦乱もなく街道や宿場町などの整備が進んだこともあり、庶民が中心となって様々な文化や風習などが生まれました。なかでも寺社仏閣への参詣は、信仰とともに物見遊山を目的とした娯楽的要素も含めて、人々の間で広まっていきました。「お伊勢参り」、「富士講」といった遠方への参詣のほか、江戸から近い参詣の場として、古くから弁財天信仰の場であった江の島、不動明王信仰の中心であった成田山新勝寺が人気でした。

今回の展示は、千葉県や船橋市に伝わる郷土資料を数多く所蔵する船橋市西図書館から成田詣や不動明王に関する貴重な浮世絵と資料をお借りし、藤沢市が所蔵する弁財天信仰のものとあわせて行います。弁財天と不動明王は人々の暮らしの中でどのように親しまれてきたのか、それぞれの特徴と信仰を江戸から明治にかけて描かれた浮世絵とともに紹介します。

# 浮世絵にみる信仰～江の島弁財天と成田不動～

## 江戸時代の信仰

江戸時代の人々にとって神仏は身近な存在でした。初詣といった大きな節目に関わらず、特定の日にお参りすると神仏と縁が深まるといわれる縁日を訪れ、毎月18日（または19日）は観音菩薩、午の日は稲荷明神といったように信仰は日常生活の中に溶け込んでいました。江戸時代の人々が願ったのは、来世での安穩とともに現世での幸福です。開運、財運、立身出世といったこの世での恵みを神仏から授けられる現世利益を願うほか、天災や疫病に対する不安も神仏に祈ることによって心のよりどころとしていました。

## 江戸近郊への参詣

江戸の市中や周囲にとどまらず、人々は「講」というグループを作って各地の寺社へ参詣を始めます。「一生に一度はお伊勢参り」といわれた伊勢神宮への参詣や霊山として古くから信仰があった富士山への登拝が行われました。しかし、遠方への参詣は長旅のため日数や旅費がかかるだけでなく、江戸を出入りする際に関所で手続きを行う必要があり、誰もが簡単にお参りできるものではありませんでした。やがて、江戸近郊にあり物見遊山という娯楽も兼ねた寺社への参詣が盛んになっていきます。特に人気の参詣地だったのが、今回紹介する弁財天信仰のある江の島、そして不動明王信仰のある成田山新勝寺でした。

## 居開帳と出開帳

弁財天信仰のある江の島、不動明王信仰のある成田山新勝寺を江戸の人々にさらに広く知らしめたのが「御開帳」でした。多くの寺社は本尊を秘仏として厨子などに納めていましたが、ある特定の日に限って厨子の扉を開き、一般の人が拝めるようにしたのが開帳です。開帳には、縁日や節目に合わせて普段納められている寺社で行う「居開帳」と、別の場所へ神仏を移動して行う「出開帳」がありました。特に出開帳は、大都市江戸で行われることで多くの信者の獲得と人々からの寄進が期待できたため、諸国の寺社がこぞって出開帳を企画しました。



歌川広重「相州江之嶋弁才天開帳参詣群集之図」  
藤沢市教育委員会蔵



永島春暁「不動尊内陣之図」 船橋市西図書館蔵



作者不詳「相州江ノ嶋弁才天上下ノ宮 己巳年御開帳繁栄之全図」  
藤沢市教育委員会蔵

江の島での居開帳は元和元年（1615）に本宮岩屋で行われたのが最初とされています。当時の江の島には本宮、上之宮、下之宮があり、それぞれ弁財天を祀っていました。その後61年目ごとの己巳年には3社の弁財天を開帳し、さらに巳年と亥年の6年ごとには順番にそれぞれの社にあった弁財天を開帳する決まりがありました。江戸での出開帳は、延宝9年（1681）に本宮の弁財天を江戸浅草第六

天境内で行ったのが古く、その後は文政2年（1819）、安政3年（1856）と深川の永代寺で開帳をしました。また、江戸の出開帳で大きく名前を知らしめたのが成田山です。成田山新勝寺の不動明王は平将門の乱を鎮めたとされ、厄除けや立身出世などのご利益で信仰されました。江戸の出開帳は、元禄16年（1703）に新勝寺の本尊不動明王を深川の永代寺にて出開帳をしたことが始まりです。その後幕末までに計11回も江戸で出開帳を行ったと記録されています。

### 不動明王と市川団十郎

さらに成田山新勝寺の不動明王を有名にした歌舞伎役者、市川団十郎の名は欠かせません。初代市川団十郎は後継ぎに恵まれず、信仰していた成田山新勝寺の不動明王に祈願しました。すると、男児が誕生し、九蔵（後の二代目団十郎）と名付けられます。このご利益から、団十郎は自らが不動明王に扮して舞台に現れる演目を作ります。成田山が初めて出開帳を行った元禄16年（1703）に「成田山分身不動」という演目を上演し、初代団十郎が仏教における胎蔵界の不動、子の九蔵が金剛界の不動となって現れることで、親子二体の不動尊が成田不動尊の分身であることを示しています。親子の不動尊が現れるのは大きな見せ場となり、出開帳と相まって大盛況であったといわれます。以降、代々の団十郎は「不動」という演目で不動明王を演じました。中でも「歌舞伎十八番」を作った名優、七代目団十郎は、毎年門弟たちを連れて成田山新勝寺へ参詣し、関係を深めていきました。

### 今も伝わる信仰

開帳の盛況ぶりは弁財天、不動明王のご利益を広めることになりました。しかし、明治時代になると江戸で出開帳の場所になっていた深川の永代寺が廃寺になるなど、廃仏毀釈の影響を受けます。それでも人々の信仰が失われることはありませんでした。明治時代以降も開帳は行われ、信者たちが参詣する様子を描いた浮世絵も刊行されています。信仰は今も引き継がれ、江の島弁財天と成田不動として人々に親しまれています。



歌川国貞（三代豊国）  
「七代目市川団十郎成田山参詣の図」  
船橋市西図書館蔵

# 日本の不動明王信仰

武井 慎悟（鶴見大学仏教文化研究所 特任研究員）

不動明王—その厳めしい顔の仏は、日本各地で「お不動さん」と呼ばれ、親しまれている。わが国では、平安時代に空海が唐から密教を請来<sup>しょうらい</sup>して以来、不動明王への信仰も根付くこととなった。しかし、意外にも、密教の発祥地インドや、密教が伝播した中国、チベットなどでは、不動尊は目立たず、日本でのみ盛んに信仰されてきた。江戸時代には、五色不動や成田山など、不動尊に因む名所が数多く存在したことから、如何<sup>いか</sup>に不動信仰がわが国に根付いていたかが窺<sup>うかが</sup>われる。

西洋人には、日本人の不動尊への篤い信仰の様子が異様に映ったらしい。戦国時代に日本に来た

宣教師、ルイス・フロイスは、不動尊を「火中に焼かれる悪魔の形状」と表現し、護摩<sup>ごま</sup>などの修法を悪魔崇拝と捉えていた。確かに、初めて不動尊を見た者は、その姿や怒りの表情に恐怖さえ感じるかもしれない。しかし、その姿に隠された意味を知ると、不動尊が身近に感じられるはずである。

不動尊の姿は「不動十九観」といって、十九の特徴があるとされる。右手に剣を、左手に索<sup>なわ</sup>を持つ、などが代表例である。剣で煩惱を切り裂き、索<sup>なわ</sup>で苦海に溺れる衆生をすくい上げる、という意味がある。面白いものでは、体が青黒く、召使いの少年のような姿で肥満体型である、といった特徴がある。これは、かつてのインド社会で下位に置かれていたドラヴィダ人をモデルにしたためという説がある。したがって、不動尊は「奴僕<sup>ぬぼく</sup>の相」といって、仏道修行者に召使いのように仕える存在とされるのである。こうした数々の特徴は、不動尊の深い慈悲を象徴するものであり、柔和な姿の仏たちと比べて、その内面が少しも変わらないことを示す。

ほかにも『不動尊剣の文』には、不動尊の持つ剣に日本の諸神が籠っていると説かれる。不動尊は、仏教の尊格であると同時に、日本国の神々をも包摂する存在と意味づけられたことも、日本の不動信仰の特徴といえるだろう。さらに不動尊は、先祖供養の場でも存在感を放っている。かの十三佛の中であって、最初に魂を導くのが不動尊であり、故人の罪障を手にした剣で断ち切り、背負った火炎で浄化しつくすのである。

このようにしてみれば、わが国における不動尊は、日本人の精神性や死生観に密接に関わってきた、極めて稀有な仏といえるだろう。本会の展示を通じて、不動尊の姿に隠された慈悲や多彩な文化に接していただけたら幸いである。



歌川国貞（三代豊国）「成田山不動の霊像」（部分）  
船橋市西図書館所蔵

<sup>1</sup> 請来：仏像・経などを請い受けて、外国から持って来ること。

# 浮世絵のぼね話 21

## 江戸時代の富士講

信仰を同じくした地域や同業者が集まり、お金を積み立て、代表に皆の祈願を託して寺社などに詣でる信徒の集団を講こうといいます。江戸時代には、江戸や周辺の農村などで盛んに行われるようになり、「江戸は広くて八百八町、講は多くて八百八講、江戸に旗本八万旗、江戸に講中八万人」とまで謡われるようになりました。

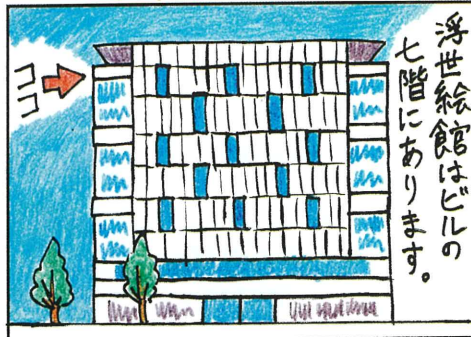
下の図は二代歌川広重のうちわ絵です。夏の富士講の様子こうが描かれています。富士山の麓にある下浅間社の鳥居の前に集まっている人々は富士講の信徒です。揃いの白装束をまとい、笠をかぶり先達せんだつ(寺社・霊山へ参詣する人の先頭に立って道案内や修行などの作法を指南する人)に引導ろうこんしようじょうされて、「六根清浄」などと唱えながら、行者として修業また祈願のため、富士山に集団登拝します。富士山の下方には、登り口と書いてあり、題名の「富士山 東口 須走り之図」の「須走り」は、富士山の東口登山道の基点です。

古来から日本では、山は神の宿るところと考えられ、平安時代には山中で苦行を行って靈験しゅげんを得る修験道げんどうが行われるようになり、日本独自の山岳信仰へと発展します。その中でも富士山は霊山として名高く、江戸時代には富士講が結ばれ、盛んに参詣が行われました。

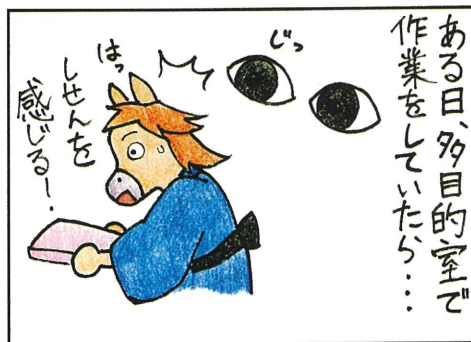


二代歌川広重「富士山 東口 須走り之図」  
藤沢市教育委員会所蔵

## 浮世場なれ



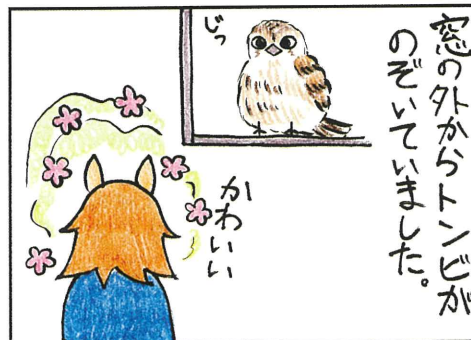
浮世絵館はビルの七階にあります。



ある日、多目的室で作業をしていたら...



おそろおそろ、ふりむくと...



窓の外からトンビがのぞいていました。

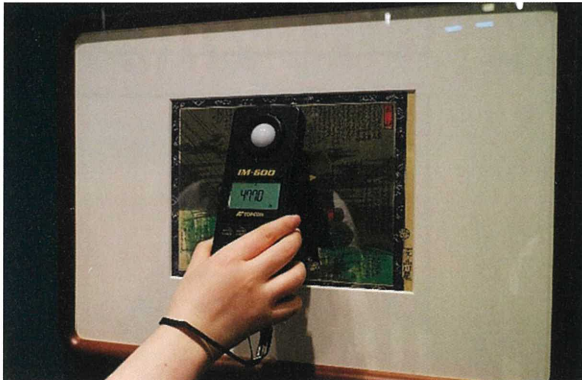


## 二代目オニカゲ学芸員のページ⑭ 光あれ!～展示室の照明のひみつ～

浮世絵館の中はちょっぴり暗いです。時にはこどもに「暗くてこわいよー」と言われてしまったことも…。でもその暗さには理由があります!実は浮世絵を展示する際にはお客様にも資料が見えつつ、資料に影響がなるべく出ない明るさに照明を設定しています。浮世絵など特に光に敏感な資料は退色してしまわないように、50lx(ルクス)以下の照明で展示するのが良いとされています。

照明の話をするうえでよく出てくるこの「ルクス」とは、明るさを測る単位の一つで、「照明に照らされた面の明るさ」を測るものです。つまり、この場合では浮世絵にあたる光の強さになります。比較のため事務室にあるオニカゲ学芸員のデスクの明るさを測ってみたところ1,040lx(!)でした。50lxがとても暗く感じてしまうのがわかりますね。

浮世絵館の明るさを調整するためには、<sup>しょうどけい</sup>照度計という道具を使います。二人一組となり、一人が浮世絵の前に照度計をかざして照度を読み上げながら、もう一人が照明を調整します。全ての作品の照明を合わせるのはちょっぴり大変ですが、資料を守るうえでは欠かすことのできない大事な作業です。



照度計を使って 50lx 程度になるまで計ります。



照明をすべて合わせたら展示が完成です!

### 編集後記

今回の展示では、藤沢市にとって馴染みのある江の島弁財天とあわせて、成田山の不動明王をご紹介します。神仏というと宗教的なこともあり、難しい印象を受けますが、今も「弁天さま」、「お不動さん」の愛称で呼ばれ身近な神仏として信仰されています。本展示を通して、浮世絵や郷土資料とともに興味を持っていただけたら幸いです。

本展では、前期・後期に分け、一部資料を入れ替えますので、ぜひどちらもお楽しみください。また、開催にあたり、船橋市西図書館をはじめ多くのご協力を賜りましたこと、この場を借りて深く感謝申し上げます。

### 編集・発行：藤沢市藤澤浮世絵館

【住所】〒251-0041 神奈川県藤沢市辻堂神台2丁目2番2号ココテラス湘南7階

【電話】0466-33-0111 【FAX】0466-30-1817

【開館時間】10:00～19:00(入館は18:30まで)

【休館日】月曜日(祝日、振替休日の場合は翌平日)

※その他、展示替えのために休館日がございます

【HP】[藤沢市藤澤浮世絵館](#)で検索🔍

【公式Instagram】[fujisawa.ukiyoe](#)で検索🔍

